

研究・調査報告書

報告書番号	担当
79	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption and lower extremity arterial disease among older adults the cardiovascular health study 高齢者における飲酒と下肢動脈疾患の関連の検討	
執筆者	
Kenneth J. Murakami, Margaret Kennedy, Mary Cushman, Lewis H.Kuller, Anne B.Newman, Joseph Potlak, Michael H. Criqui, and David S. Siscovick	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
American Journal of Epidemiology 2008;167:34-41	
キーワード	
高齢者、飲酒、下肢動脈疾患、前向きコホート研究	
要 旨	
<p>(目的)</p> <p>これまでの研究では中等量飲酒が冠疾患のリスクの軽減と関連していることが報告されている。しかし、飲酒と下肢動脈疾患との関連は明らかではない。本研究では高齢の在宅地域住民を対象に飲酒と下肢動脈疾患の関連について検討する。</p> <p>(方法)</p> <p>the cardiovascular health study の対象者で 65 歳以上の高齢者 5635 人を対象として毎年飲酒状況について調査した。下肢動脈疾患発症の確認を病院調査により行った。6 年ごとに 2298 人の Ankle Brachial Index(ABI)を測定した</p> <p>(結果)</p> <p>1989 年から 1999 年の間に 172 人の下肢動脈疾患の発症を確認した。平均追跡期間は 7.5 年だった。下肢動脈疾患の多変量調整ハザード比(95%CI)は禁酒者を対照とすると一週間あたり一杯未満で 1.10(0.71-1.71)、一週間あたり一杯以上 13 杯未満で 0.56(0.33-0.95)、一週間あたり 14 杯以上で 1.02(0.53-1.97)であった (傾向性の P=0.04)。このような関連は性別、年齢、アポ蛋白 E ジェノタイプにより層別化した検討でも同様に認めた。しかし、脂質、炎症マーカーは飲酒と下肢動脈疾患の関連の重要な媒介変数ではなかった。ABI の変化も飲酒と同様の傾向を認めた (傾向性の P=0.01)。</p> <p>(結論)</p> <p>高齢者において一週間あたり一杯以上 13 杯未満の飲酒は下肢動脈疾患のリスク軽減と関連がある可能性があるが、多量飲酒はこのようなリスク軽減との関連は認めなかった。</p>	